

# アドルノの Bildung 概念における時間の位相について

—美的経験の瞬間と歴史の問題を中心に—

白銀夏樹

(2001年9月28日受理)

Über die Zeitvorstellung von Bildungsbegriff Adornos  
--die Problematik des ästhetischen Augenblicks und der Geschichte--

Natsuki Shirokane

Bildungsbegriff, der eigentlich vielfältige Bedeutungen impliziert, hat auf der sukzessiven Zeitvorstellung konstruiert. Die Modell dieser Zeitvorstellung ist Bildungsroman wie philosophische Texte Hegels. Aber in der Moderne --so Adorno lautet-- ist diese Zeitstruktur schon verfallen. Abfolge der "punktlichen" Gegenwart-- das ist die neue Dimension der Zeitstruktur in der Moderne.

Die Hauptthese dieser Arbeit lautet, dass Adornos Bildungsbegriff, der die Möglichkeit von Menschlichkeit in der Moderne in Betracht zieht, auf eine ästhetische Zeitvorstellung konstruiert. Die Gegenwart ästhetischen Augenblicks bezieht auf Vergangenheit und Zukunft, und weiter sie bewegt als eine Dynamik von Bildung wie von Modernismus, welche ist anders als Dynamik von hegelscher Bildung.

Key Words: Adorno, ästhetische Bildung, Erfahrung, Zeitvorstellung

キーワード: アドルノ、美的 Bildung、経験、時間意識

## 1. はじめに

ドイツ語における Bildung という言葉は「陶冶」「教養」「人間形成」などと訳されるが、近年の教育学においては、とりわけ「人間形成」という意味に重点が置かれているように思われる。日本語の「教育」を直接に想起させる Erziehung に比べても、自己が自己を形成していくという意味が込められたヘルダーの Bildung 概念にみられるように、自己をより人間らしくしようとする「自己形成」の意味も Bildung の言葉は積極的に含んでおり、人間の成長・発達を包括的に指し示した言葉といえよう。

また他方で、「教養」と訳されることから伺えるように、個人史には還元されない人類の歴史の次元も Bildung は指し示している。たとえば個と普遍の媒介として Bildung を位置づけたフンボルトにおいても、個人による普遍の内面化とは人類の歴史を引き受けることであり<sup>(1)</sup>、それによって個と普遍の調和的発展が約束されていた。つまり Bildung とは、個人史と人類史とが相互に織り

なす発展的なダイナミズムを指し示す言葉として理解されてきたといえるだろう。

だが、近年の教育学には、このような旧来の Bildung 理解には容易に回収されない美的なものの意義を議論しようとする動向も看取される。これらの議論では、客観的・合理的なものというよりもむしろ主観的・感性的とされる美的経験に、積極的な人間形成上の意義が見出されている。ただし、ここでいう人間形成とは個人史と人類史の織りなす調和的発展のダイナミズムを直接的に意味してはいない。むしろ、たとえば「束の間の一瞬に閃く現在のアクチュアリティの賛美」と形容されるように<sup>(2)</sup>、やがてより高次のレベルへと発展的に回収・解消される前段階の一契機としてよりも、むしろ個人の側における美的経験そのものの瞬間性・垂直性に重点を置きながら、その意義は議論されるように思われる。

ところで、このような議論の背景となったものとして、科学技術の発展によって可能となった大量殺人や環境問題などに代表される、いわば合理性の隘路とし

ての現代固有の問題を批判的に捉えようとする動向が挙げられるだろう。このような現代的問題を視野に入れるならば、発展的な人類史のヴィジョンからは距離をとらざるをえず、むしろこのような現代的問題を打開する可能性が美的経験をはじめとする美の問題圏に託される。それ故に、発展的な人類史観にまるで対置されるかのように、美的経験の瞬間性・垂直性はそれ自体として積極的に評価されているように思われる<sup>(3)</sup>。

このような現代固有の問題に対する批判と美的なもの可能性という問題構成をもとに思想を構築した先駆者のひとりとしてしばしば参照されるのが、ドイツの思想家アドルノ (Theodor Wiesengrund Adorno, 1903-69) である。アドルノは合理性の隘路としての現代的状況を「啓蒙の弁証法 (Dialektik der Aufklärung)」として批判し、それから人々が距離をとる可能性を美的なものに見出し、遺著『美の理論 (Ästhetische Theorie)』(1971年)を著したといわれる。実際、美的なものをめぐる議論に関しても、教育学に限らず哲学・美学・文学において彼の思想に言及されることは少なくない。

本論文の課題は、このように現代において注目されているアドルノの Bildung 概念から、美的なもの議論を手がかりとしつつ、独自ともいえる時間意識の一端を明らかにすることにある。彼の Bildung 概念には、一見すると旧来の Bildung 概念と通底するかのような、個人史・人類史の含意と美的経験の瞬間性・垂直性との緊張関係が見いだされる。しかし本論文では、現代社会に特有の時間意識に対する批判を経由したアドルノの Bildung 観を支える時間意識に焦点をあてたい。

## 2. ヘーゲルにみる Bildung の時間意識

旧来の Bildung 概念における時間意識を明らかにする際、ひとつの典型的なモデルとされるのが、ヘーゲルの思想に読み取られる Bildung 概念である。ヘーゲルの弁証法には「自己の同一を求めて動く人間の運動」が「過去という全体へと累積されていく出来事の原理の中に回収され」る Bildung のダイナミズムがそのまま見出されるのであり、「近代における成長発達物語」の「ひとつの完成」を見出すことができるといわれる<sup>(4)</sup>。認識・実践の対象との媒介的な関係において自己変容の運動が生まれ、それによって自己の同一性が非同源性に晒されることで危機に陥りつつも、やがてその危機は克服されさらなる高次の自己を獲得していく—現在の一般的な「発達」概念にも通底する、このような Bildung の運動を典型的に示すものをヘーゲルの思想に読み取ることができるだろう。アドルノ自身によ

る次のような言明にも、ヘーゲルの思想におけるこのような Bildung 的側面を看取していたことがうかがわれる。「ヘーゲル哲学においては、・・・<中略>・・・自分の世界経験の内部で世界を解釈しつつ精神を捉えるとともに、また精神の運動の内部でこの経験は構成されるのである」<sup>(5)</sup>。

このような Bildung 観を支えるのは、一般的な「発達」概念と同様に、現在をなかだちとしつつ過去から未来へと一方向的に結ばれた時間軸である。確かにこの時間軸は単なる連続的な直線を描くものではなく、時には何らかの危機的な断絶の瞬間を孕んだものがある。しかし、先行する過去の出来事はやがて未来のものによって発展的に回収されるという点では、過去から現在、そして未来へと一方向的に向かう時間軸によって支えられているといえよう。そして未来の Bildung の終着点から危機的な瞬間を振り返るならば、それは終着へと向かうダイナミズムの一契機であったとみなされることとなる。つまりこのような Bildung 観は、「先行するものと後続するものとが結び付けられ、それによって様々な時間の断面の同時性がひとつの機能的な時間の連続へともたらされる」という、発展の「継起的な時間の原理」に則っているのである<sup>(6)</sup>。このような Bildung における時間意識を、今井康雄に倣い「教養 (Bildung) 小説的な時間意識」と呼ぶことができるだろう<sup>(7)</sup>。

ただし、周知のようにヘーゲルにおけるこのような時間意識は、単なる個人の人間形成的な次元にとどまるものではない。イポリットによって「哲学的な教養小説」と呼ばれたヘーゲルの『精神現象学』においては、よく知られる「自己意識」の章で、個人のレベルにとどまっていた自己意識がやがて自らとは異なる他者の自己意識に出会い、やがて「異なった、自分だけで存在する自己意識という形での、ふたつの自己意識の対立が、完全に自由であり、独立でありながらも、両者が、すなわち、われわれである我と、我であるわれわれとの両者が一つであるという、この絶対的実体」としての「精神」が形作られる<sup>(8)</sup>。絶対精神を終着点とした「意識の経験」(『精神現象学』の副題は「意識の経験の学」である)のプロセスは、個人のレベルにとどまることなく、人類史の次元も含みこんでいるのである。

## 3. 経験の契機の欠如した現代における時間意識

以上のような教養小説的時間意識は、例えばアイデンティティ発達の問題を扱ったエリクソンの発達理論

にみられるように、主に個人の人間形成という次元において現代においても優勢であろう。だがヘーゲル達の時代と現代との隔たりを考慮するならば、ヘーゲル的なBildung理解に収まらず、教養小説的時間意識を相対化する事態が現代において生じている可能性も否定できないだろう。

アドルノこそ、ヘーゲルの時代と現代との隔絶を主題化しつつ、ヘーゲル的なBildung概念とその教養小説的時間意識が、現代においてもはや不可能になったことを看取した思想家であった。ここでは現代におけるBildungの位相と、それを支える現代的な時間意識の位相に対するアドルノの洞察を、先述したヘーゲルの思想と対比させつつ整理したい。

アドルノは現代の状況下に置かれた人間のありようを、しばしば「経験の喪失」と形容している<sup>(9)</sup>。これまでのBildung理解に従うなら、内的合理性としての自己の同一性は外部にある他者の非同一性に触発されることで経験を果たし、より高度の同一性を実現するとされていた。しかし現代においては、同一性の原理に支えられた合理性が至るところに貫徹されており、非同一性の経験が成立し難くなっているとアドルノはみる。労働の局面においては資本主義の徹底によって、交換原理の優位や労働の労働時間への還元計測といった、多様な個が共通の尺度で測りうる同一的なものとされる事態が生じている。かつては教養の第一の担い手とされた文化的局面においても、文化産業の勃興によって平均的で万人向けの画一化された製品が氾濫することとなっている。このような現状のただ中に生きる人々の思考や感性も、この現状の社会的威力によって馴化され、現状を支配する同一性の産物であるステレオタイプを内面化している。その結果、非同一性の経験を可能にした自己と他者を隔てる「疎外」—この「疎外」を前提としてはじめてヘーゲル的な経験は生じる—が成立し難くなったのである。

ところで、「疎外」を前提とした経験の契機を、個人を馴化することによって喪失させた全体性は、アドルノによって「世界精神」と呼ばれている。この概念自体はヘーゲルから借用されたものであるが<sup>(10)</sup>、まるで「未開人からヒューマニティへと通じる普遍史」を描いたかのようにもとらえられるヘーゲルにおけるBildungの人類史的側面は、「歴史の非連続的な、カオスのように寸断された諸契機や様々な局面をつなぎ合わせている統一性」というBildungの図式を踏襲したまま、アドルノにおいては「『石斧から水爆へ』と通じる普遍史」という人類史を描く可能性へと転換され、「世界精神」とは「永続的破局」としてとらえられるのである<sup>(11)</sup>。

それが社会的に実現されたものの例としては、文化

産業をめぐる時間のありようを取り上げることができらう。現代においては市場原理に基づいた文化産業の製品が社会に行き渡るとともに人々の感性もステレオタイプ化され、「買手の画一主義が常に同じものの再生産に安住している。・・・後期自由主義段階に対する大衆文化段階の新しさは、新しさを排除するところにある。機械は同じ状態で廻転する。機械はすでに消費高を規定する一方、テスト済みでないものは危険だとして排除する。」<sup>(12)</sup>

また個人のレベルにおいては、戦線における兵士の経験がそれを象徴する。「・・・戦火に伴う爆発の度ごとに随所で、人間に備わっている刺戟を防ぐ保護膜が破られてしまうのだ。生の様相はいつ果てるともないショックの連続になり変わったのであり、ショックの合間には麻痺した空隙が大きく口を開いているのである。しかし何より将来に大きな禍根を残すと考えられるのは、文字通り誰ひとり戦争のことをまともに思い出せなくなるという事態である。」<sup>(13)</sup>

このような現状の時間の様態によって、もはや現在をなかだちとした過去と未来の連続性を発展的に描き難くなるだろう。いわば過去も未来もない、「単なる今」という抽象的な点」としての現在が永続的に続いていく<sup>(14)</sup>、そのような時間意識がリアリティを獲得するのである。このような、到達点を全く見いだせないままただ現在という点が永続的に継起する時間意識のありようこそ、ヘーゲル的な意味でのBildungの不可能性とともアドルノが見いだした現代的な時間意識なのである。

#### 4. モダニズム的な美的経験

以上のような現状認識に従うなら、そこでの時間の様態からして、個人においても普遍においても発展的なプロセスをとることはなく、両者の発展的調和というBildungの理想も成立しえない。普遍の側の「世界精神」による個人の馴化によって、個人と普遍の対立は調停こそされているが、Bildungの発展的な方向性は悪しき現状の再生産が含意する永続性によって取って代わられている。このような現状においてもなお何らかの形でBildungの理念を継承し、可能性を有したものと呼べる現代的なBildungを描くことはできないだろうか。ここで注目されるのが、現代におけるモダニズム芸術の存在様態である。

現状から距離をとり「世界精神」の専制に抗するための手がかりとしてアドルノが芸術に代表される美的なものに着目したのは周知の通りであるが、ヘーゲル以後のある種の芸術作品—しばしばアドルノが挙げる

ものとしては音楽におけるマーラーやシェーンベルク、文学におけるボードレールやカフカやベケットなどの芸術作品一存在様態は、現代的な時間の様態のただ中でなおも成立しうる Bildung のありようを示しているのではないだろうか。ここではカップナーの論を手がかりに<sup>(15)</sup>、モダニズムを範とする、経験と Bildung のあり方をまずはとらえたい。

アドルノの看取したモダニズム芸術のメカニズムを、まずは確認しよう。現代の非人間的ともいえる悪しき現状を招来したものとして、人類史における諸々の苦悩を疎遠なものとする忘却の働きが挙げられる。人類史における苦悩が忘却されることで現代の状況は可能となったのであり、またこの忘却が絶えず繰り返され持続することによって現代の状況は再生産され続けるわけである。しかしこの忘却されたものは「意図的なものではない記憶 (Gedächtnis) の中に保たれて」おり、非意識的な回想 (Erinnerung) の働きによって時として瞬間的に顕在化される。これが回想の働きによって生まれる、現状が裂け目を見せる瞬間的な経験である。ただし、この経験のただ中においては、現代的な視座から忘却されたものが見つめられるのではない。その反対に、忘却されたものの視座から現代という時代が見つめ直され、経験以前には自明のものであった現状は、過去のものを忘却へと至らしめた抑圧的な構造として看取される。そして同時に、苦悩もその忘却ももはや起こることのない、これまでの人類史の状況とは全く異なった「未だ存在しなかったもの」という、未来におけるユートピア的な状況への予感を生むのである。

そしてこの予感によって支えられているのが、モダニズム的な芸術の運動である。伝統から身を引き離し、新たなものへと向かおうとするモダニズムの運動についてアドルノはこう述べる。「……モダニズムは、未だ存在することがなかったものを語ることはできないが、永遠に同一のものに留まるという恥辱を避けるために、未だ存在することがなかったものを求めることを余儀なくされる」<sup>(16)</sup>。そのためには、伝統にもはや束縛されないように、伝統に通暁しその諸条件を全て満たしていることが必要となる。そこでは「忘却された苦悩」を「歴史の痕跡」としてとどめている「事物、言葉、色彩、音」も、それが伝統である以上、伝統から身を引き離す運動の中で批判的に洞察されることとなる。このような意味においてモダニズム芸術とは「最も進歩した意識の芸術であり、そこでは、最も前衛的で最も繊細な経験を伴った、最も前衛的で最も繊細な行動様式がとられている」のである<sup>(17)</sup>。

## 5. モダニズム的 Bildung の時間意識

以上のようなモダニズム芸術のメカニズムは、経験が喪失し絶えざる現在の連続という時間の位相に貫かれた現代の状況において、ヘーゲル的な Bildung 概念を継承したものとして捉えることは不可能ではない。確かにここでは、その橋渡しを行う経験のダイナミズムとともに過去—現在—未来の関係が意識化され、未来のユートピア的なイメージが保持されている。

しかしより詳細に見るならば、ヘーゲル的 Bildung に対するモダニズム的 Bildung は、その経験の概念をめぐる時間意識の位相において、決定的に異なっているといえよう。モダニズム的 Bildung は、過去と現在と未来のいずれもが同一の時間軸に並ぶような時間意識の上に成立しているわけではない。点としての現在が連続するような時間意識に支えられた現代の状況下において、過去の意識や未来の意識は全く疎遠なものである以上、点としての現在が Bildung の端緒とならざるを得ないのである。

また回想が瞬間的な経験として成立するためには、現在と過去とが忘却によって疎外されていることが前提となっている。ヘーゲル的な教養小説的時間意識においては、過去から現在へと方向づけられた連続性を前提にして、そこに断絶が挿入されていた。しかし絶えざる現在の連続という現代的時間意識においては、現在を成立させた一契機として過去を位置づけることができないばかりか、すでに過去という意識そのものが成立しておらず、いわば現在と過去は Bildung のはじめから断絶しているのである。この断絶が前提となっているからこそ、忘却されたものの回想によって成立する経験が瞬間的で垂直的なものとなるとさえいえるだろう。

さらに、忘却されたものは回想によって現在に呼び戻されたとはいえ、後続するものによって発展的に回収されるわけではない。モダニズムは伝統から身を引き離す運動によって特徴づけられているため、忘却されたものはモダニズムの運動において発展的に取り込まれるのではなく、むしろそこから身を引き離すべき対象としてみなされる。ここにおいて回想による経験とは、過去と未来の連続性が成立ための端緒ではないという意味で、瞬間的・垂直的なものといえるのである。

そして、この伝統から身を引き離す運動は、その運動が終着点に到達することではなく、伝統から断絶していく運動それ自体に意義を有するために、未来に終着点を持つ目的論的に構成されたヘーゲル的な教養小説的時間意識とは大きく異なる。さらに、例えば「ユー

トピアは実現されないからこそユートピアだ・・・理想は現実から隔絶しているからこそ理想だ」と評されるように<sup>(18)</sup>、未来への方向性で志向されるユートピアは、現在との連続的な時間の延長上に描かれることはない。ここにおいても現在とユートピアとしての未来は絶対的に断絶している。

モダニズム的なBildungは、点としての現在が絶えず連続する現代の状況下において、過去-現在-未来を関係づける意識とそこで生じる経験のダイナミズムを描いている点で、確かにヘーゲル的な教養小説的時間意識と共通するものがある。しかし過去-現在-未来は、連続的な共通の時間軸の上で捉えることはできない。あくまで現代的な点としての現在を出発点として、過去との関係、そして未来との関係においても、絶対的な断絶を前提としたダイナミズムを描いていく—このようなBildungが現代においてなおも可能なものとして、アドルノのモダニズム理解から描き出されるのである。

## 6. おわりに

このようなモダニズム的Bildungのあり方は、ヘーゲル的なBildungとはまた異なる、個と普遍との関係を描き出している。ヘーゲル的なBildungにおいては、個と普遍とは調和的な発展を遂げるはずである。しかし圧倒的な「世界精神」の威力のもとでは、個と普遍とは調和を果たすのではなく、普遍による個の馴化とならざるをえない。そこでアドルノはむしろ普遍に対する個の抵抗を評価しようとする。

しかしモダニズム的Bildungは、個の完全な主観にとどまるものではなく、むしろ普遍によって馴化された個人よりも、ある意味で歴史との関係を密接に持っているといえる。なぜなら、人類史において忘却されたものは、個人の内的な記憶の中ではなく、むしろ個人を越えた集合的な記憶の内に保存されているからである。またその忘却されたものに触発されたモダニズムの運動によって志向されるユートピアもまた個人の内的な次元にとどまるものではないといえるだろう。このような意味で、普遍によって馴化され点としての現在の連続を生きる人々よりも、より人類史に接点を持ったBildungの様態として、モダニズム的Bildungは捉えることができるのである。

アドルノが希望をゆだねたモダニズム的Bildungは、過去・現在・未来の一方向的な連続性を前提とした教養小説的時間意識とは異なった時間意識に支えられている。そのような時間意識の現代における不可能性を出発点にしつつ、悪しき現状から距離をとるBildung

概念を描こうとしてアドルノは、瞬間的な美的経験のただ中で生じる過去と未来との断絶と緊張関係に、現代においてなお可能性を有するBildungのダイナミズムを位置づけた。そしてこのようなBildungは、個人の主観的な次元にとどまるのではなく、現代においては点としての現在の連続によって妨げられた、歴史との関係をとりもどしているといえるだろう。

## 註

- (1) たとえば桜井佳樹「フンボルトの人間形成論と近代教育思想」小笠原道雄監修、林忠幸・森川直編『近代教育思想の展開』福村出版、2000年、84-88頁を参照。
- (2) 野平慎二「現代における人間形成と『美的なもの』—『ポストモダン』と『未完の近代』の間—」教育哲学学会『教育哲学研究』第76号、1997年、129頁。
- (3) 野平「現代における人間形成と『美的なもの』—『ポストモダン』と『未完の近代』の間—」、128-129頁を参照。
- (4) 鈴木晶子「『発達』の行方」『現代思想』vol. 25-12、1997年、270頁。
- (5) Adorno Gesammelte Schriften, Frankfurt am Main 1970-86, Bd.5 S.297. (渡辺祐邦訳『三つのヘーゲル研究』河出書房新社、1986年、87頁。) (以下、Adorno Gesammelte SchriftenはGSと略記する。)
- (6) Zimmermann, N.: Der ästhetische Augenblick. Theodor W. Adornos Theorie der Zeitstruktur von Kunst und ästhetischer Erfahrung, Frankfurt am Main 1988, S.85.
- (7) 今井康雄『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育—』世織書房、1998年、231頁。
- (8) ヘーゲル著、檜山欽四郎訳『精神現象学』平凡社、1997年、218頁。
- (9) この点については拙論「アドルノの経験概念に関する—考察—言語的経験をめぐるアドルノのヘーゲル理解を中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第46巻第一部、2001年、56-61頁の「Ⅱ.『経験の喪失』と『非同一性の経験』」を参照されたい。
- (10) GS6 S.298. (木田、徳永、渡辺、三島、須田、宮武訳『否定弁証法』作品社、1996年、368頁。)
- (11) GS6 S.314. (『否定弁証法』388頁。)
- (12) GS3 S.156. (徳永恂訳『啓蒙の弁証法』、岩波書店、1990年、206頁。)
- (13) GS4 S.60. (三光長治訳『ミニマ・モラリア』法政大学出版局、1979年、67頁。)

- (14) GS11 S.69.
- (15) Kappner, H.-H. : Die Bildungstheorie Adornos als Theorie der Erfahrung von Kultur und Kunst, Frankfurt am Main 1984.
- (16) GS7 S.40. (大久保健治訳『美の理論』河出書房新社、1985年、41頁。)
- (17) GS7 S.57. (『美の理論』55頁。)
- (18) 川本三郎『アレゴリーの織物』河出書房新社、1991年、188頁。
- (19) 拙論「アドルノの思想における教育論の位置」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第45巻第一部、2000年、51-55頁を参照されたい。